

初級を終えたら何を教えるべきか ——中国語準中級・中級テキストで取り上げられる 補語について——

蟹 江 静 夫

1 はじめに

学習者にとって、授業で使われるテキストは絶対的な存在である。教員はテキストに沿って授業を進め、適宜、補足事項を加えるなど自分でアレンジして使用する。もしテキストに書かれていることに誤りがあれば、教員はそれをたださなくてはならない。だが、その一方で学習者のテキストに対する信頼が揺らいでしまう。テキストの作成にあたっては、かなり慎重な姿勢で臨まなくてはならない。テキスト編著者には、発音や文法について正確な知識が不可欠である。

テキストを作成するからには、従来のものにはないオリジナリティが求められる。編著者がいかなる意図をもって、学生に何を学ばせたいのか、いかに学ばせたいのか、確固たる立場がなくてはならない。確固たる立場のうえで新たなアイデアが浮かべば、自らテキストを作成し、公にする。実際に使用してみて必要があれば、随時、修正を加えてもよい。そうすることによってより完成度の高いテキストが生まれる。また、オリジナリティは学習者にとってわかりやすく、合理的なものでなくては意味がない。

初級テキストに目をやると、まさに汗牛充棟、さまざまな工夫がこらされていて興味深い。残念なことに、他のテキストを模倣したようなオリジナリティのないもの、オリジナリティがあっても、学習者の理解しやすさを考慮しない文法項目の配列をするなど、不親切なものも少なくない。た

だ、取り上げられるポイント項目の内容には大きな差はないだろう¹。初級テキストの問題は、「何を取り上げるか」にはなく、「どう取り上げるか」にあるようだ。

他方、初級を終えた学習者を対象とする準中級・中級テキストの場合はどうか。そこには「どう取り上げるか」に先立って、「何を取り上げるか」を考える必要があるように思われる。たとえば、初級で学んだことをいま一度振り返るのか、それとも一歩すすんで初級では取り上げなかったことを教えるのか。

先行研究として、中級教材における語彙について考察したもの²、中級学習者の学ぶべき文法事項を整理したもの³、個別の文法事項についてその教え方を考察したもの⁴、などが挙げられる。しかし、現行の準中級・中級テキストで取り上げられる文法事項について指摘したものは、見当たらない。

本稿では、10冊の準中級・中級テキストのポイント項目について調べ、初級を終えた学習者に具体的に何を教えるべきなのか、を考察する。10冊のテキストを検討した結果、共通して取り上げられるポイント項目を主に扱う。本稿ではそのなかでもまず補語について考察することにした。なぜなら中国語をマスターするうえで、補語をいかに使いこなせるかが重要であるからだ。

補語の教育に関する研究は、補語を全体的に考察したもの⁵、方向補語や数量補語など個別のものに限定して考察したもの⁶、など多岐にわたる。いずれも中国語学の研究から得た知見を整理したもので、準中級・中級の段

¹ しかし、近年の初級テキストは文法項目を減らす傾向があるようだ。

² 浅野2012、浅野2013a、浅野2013bなど。

³ 大西2011。

⁴ 平山2011など。

⁵ 姚2009、姚2010、張2011など。

⁶ 丸尾2011、秋山2011など。

階で何を取り上げるべきか、に関するものではない。

2 調査の対象とするテキストについて

調査の対象とするテキストは、大学2年次の授業で週1回90分、一年間の授業（合計30回程度）で1冊学び終えることを想定して作られたものを取り上げる。具体的には以下の10冊のテキストである。これらはあるものは準中級、あるものは中級と称しているが、いずれにせよ初級段階を終えた学習者を対象にしていると思われるので、同時に取り上げた。(1)から(5)は本文に会話文を据えた会話テキスト、(6)(7)は1課に会話文と読解文を据えた会話・読解テキスト、(8)から(10)は読解文を扱った読解テキストである。

(1) 竹島金吾監修、尹景春・竹島毅著『《新版》中国語 さらなる一步』白水社、2002年。

(2) 塚本慶一監修、劉穎著『2年生のコミュニケーション中国語』白水社、2002年。

(3) 本間史・孟広学『2年めの中国語ポイント45』白水社、2014年。

(4) 陳淑梅・張国璐『改訂版中国のひとり旅』駿河台出版社、2013年。

(5) 相原茂・蘇明『日中いぶこみ12景』朝日出版社、2014年。

(6) 内田慶市・奥村佳代子・塩山正純・張軼欧『中国語への道 [準中級編] 浅きより遠きへ 改訂版』金星堂、2014年。

(7) 遠藤光暁監修、衛榕群・汪暁京著『ビジュアル中国』朝日出版社、2014年。

(8) 劉穎・紫森・小澤正人『2冊めの中国語《講読クラス》』白水社、2012年。

(9) 杉野元子・黄漢青『大学生のための現代中国12話・Ⅲ』白帝社、2012年。

(10) 本間史・張明潔『中国語読解のコツ』金星堂、2015年。

3 補語をいかに分類するか

中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会が2007年3月に発表した「中国語初級段階学習指導ガイドライン 文法項目表」(以下「ガイドライン」)によると、補語を「接続成分“得”を必要としない補語」と「接続成分“得”を必要とする補語」の2つに大別したうえで、6つに分類する。その6つとは、「結果補語」「方向補語」「可能補語」「程度補語」「数量補語」「状態補語」である。「結果補語」から「数量補語」までが「接続成分“得”を必要としない補語」で、「状態補語」が「接続成分“得”を必要とする補語」である。

まずこの「ガイドライン」で問題となるのは、「程度補語」と「状態補語」の扱いである。「ガイドライン」について詳しく説明した興水・島田2009を見ると、「程度補語」は“好极了”“忙死了”などに限定し、“好得很”“高兴得不得了”“今天热得不得了”といったものを「状態補語」に入れる。

しかし、このように“得”の有無のみで補語を2つに大別することを重視する一方で、〈形容詞や一部の動詞の後に置き、高い程度を表す〉という共通の意味を有する“~极了”の類いや“~得很”の類いを別のカテゴリーに分けることは、学習者の便宜に応じているとはいいがたい。教育文法には学習者によりわかりやすい説明を与えることが求められる。“~极了”の類いと“~得很”の類いは、やはり一つのカテゴリーに入れ、従来の文法参考書にあるように「程度補語」とする方が学習者にとってはよりわかりやすいのではないか。

また、「ガイドライン」では「可能補語」を「接続成分“得”を必要としない補語」の一つに入れている。そうすると、学習者は「状態補語」で使われる「接続成分」である“得”と「可能補語」で使われる“得”とはどういった違いがあるのか、といった疑問が生じるおそれがある。

筆者は、“得”の有無で補語を大きく2つに分けることは、補語を教える

うえでさほど重視するべき事柄ではないと考える。むしろそれぞれの補語の用法をわかりやすく説明し、正しく使えるようにもっていくことが、教育現場では優先されるべきことではなからうか。

以上のことをまず指摘したうえで、それぞれの補語について、準中級・中級テキストがどう取り上げているのか、そこにどういった問題点があるのか、を考察する。

4 結果補語

結果補語の数はおびただしく、動詞と結果補語の結びつきに関する辞書もあるくらいである。テキストの作成にあたっては、どういった結果補語を取り上げるのかが問題となる。

「ガイドライン」では“～完”“～好”“～住”“～清楚”が挙げられる。そして説明に「入門段階で学ぶ結果補語の多くは動詞と補語の結びつきが熟語化しているの、一定量の動補連語を学ぶまでは、補足型の複合動詞としてあつかう」とある。複合動詞として扱う例として“看”につく結果補語“看完”“看见”“看上”“看惯”が挙げられている。“看见”“看上”“看惯”はともかく、“看完”を熟語化した複合動詞として扱うのはいかなものだろう。“～完”は多くの初級テキストにも出てくるが、その際に“吃完”“写完”“说完”などいくつかの例を出せば、「動作+その結果」という構造が初級者でも容易に理解できるだろう。従来の初級テキストを見るかぎり、結果補語を導入する前に複合動詞としてわざわざ説明する必要もないと思われる。「ガイドライン」でも言及するように、複合動詞として扱うべきものは、あいだに“得”“不”を挿入して可能補語が作れないという、ほかの結果補語とは異なる統語的ふるまいをする“～到”(到達点)“～在”“～给”の3つに限定すればよい。これらは介詞補語と説明されることもあるが、“到”“在”“给”の直後に“了”がおけるなど、およそ介詞とはいえないふるまいをすることもできるので、やはり複合動詞として説明したほう

がよい⁷。

さて、準中級・中級テキストを調べると、取り上げられる結果補語には一定の傾向があることがわかる。2冊以上のテキストに出てくるのは、“～到”（獲得）“～完”“～好”“～懂”“～错”“～上”（付着）“～清楚”“～成”の8つであった。“～成”を除けば、いずれも初級テキストにも出てくるものである。したがって、準中級・中級テキストの結果補語に対する扱いは、初級で学んだ知識を再確認したうえで、より強固にしようとする意図がうかがえる⁸。また、1冊あたりに取り上げる数として、多いものでは先の複合動詞“～到”“～在”“～给”を含めて9つに上るもの（『さらなる一歩』）もあれば、項目としてまったく取り上げないもの（『現代中国12話・Ⅲ』）もあった。

結果補語の説明として興味深い事例としては、以下の2つが挙げられる。一つは“～到”の意味を「行為の目的が達成されたことを表わす」というように「達成」義とするところである。しかし、筆者は授業で「達成」に「獲得」という概念も加えて説明するようにしている。なぜなら、本文や例文では“买到”“找到”などといった「買って～を手に入れる」「探して～を手に入れる」といった用例が多く見られ、「達成」だけではいささか抽象的でわかりにくく、「獲得」（手に入れる）を加えたほうがよりわかりやすいのではないかと考えているからである。

いま一つは、「付着」義の“～上”を方向補語とはせずに結果補語としてとらえるものがいくつかあることである。ここで問題となるのが、移動の意味を失った方向補語を結果補語としてしまうのか、あるいは方向補語の派生義とするのか、という点である。荒川2003:79-82では、“～上”“～

⁷ 荒川2013:91では、“～给”“～在”を「准結果補語」とする。

⁸ 町田2004:49は、初級の学習範囲に対する検討が不十分で、その結果「複雑で理解に時間を要するといわゆる「補語」などは、初級の授業では簡単に扱うにとどめ、中級の授業になると今度は初級で学習済みとして個別の問題しか扱わないという現象も見られる」と指摘する。

下”といった単純方向補語の派生義を結果補語とする。それに対し、“～下来”“～下去”(継続)、“～起来”(開始など)といった複合方向補語の派生義は方向補語の派生義としている。これは使用頻度に着目した結果なのかもしれない。

準中級・中級テキストで取り上げられている結果補語は、いずれも上のような簡単なもの限られている。自動詞でかつ使役的な意味になる場合の結果補語の用例が見当たらなかった。たとえば、“台风刮倒了很多树”のように、“刮”の主体が“台风”で、“倒”の主体が“很多树”といった、学習者にはわかりにくい構造のものは取り上げていない。こうしたものも取り入れていかないと、結果補語をより深く理解することはできないので、“～倒”あたりはテキストに入れてもよいのではないだろうか。

5 方向補語

方向補語に関しても「ガイドライン」では、結果補語と同様にまず複合動詞として教えることを提唱する。しかし、筆者はこれには賛成しない。学生にははじめから“拿来”は「持って+こちらにやってくる」と動構構造であることをしっかりと認識させるべきである。授業で説明するとき、方向補語は字面において日本語とほぼ意味が対応しており、結果補語のように概念をくり返し説明する必要がない。そのため、容易に理解できると考えるからである。

方向補語においてやっかいなのは、目的語の位置である。「ガイドライン」には「方向補語と動詞に対する賓語の位置(初級段階では簡潔に説明)」と書かれている。用例に“走进教室”“进教室来”“走进教室来”“拿出一本书来”“拿出来一本书”が挙げられる。これは簡潔にして要を得た例であり、筆者もこれに同意する。ところが、初級テキストでは目的語が「場所目的語」の場合の説明に偏っているようだ。「ガイドライン」でいうと“走进教室”“进教室来”“走进教室来”の例である。場所目的語以外の

目的語でも“来”“去”の前におけば統語上は問題ないからだろう⁹。

それでは、準中級・中級テキストでは方向補語がいかに扱われているのかを見てみよう。

方向補語は「単純方向補語」と「複合方向補語」に分けられる。「単純方向補語」は“来”“去”“上”“下”“进”“出”“回”“过”“起”、「複合方向補語」は、“上”“下”“进”“出”“回”“过”“起”の後に“来”“去”がついたもの（“起”は“来”のみ）である。

10冊の準中級・中級テキストを見てみると、単純方向補語と複合方向補語を同時に取り上げたものが半数の5冊、複合方向補語のみ取り上げたものが2冊、単純方向補語のみ取り上げたものが1冊、まったく取り上げないものが2冊あった。まったく取り上げないものはいずれも読解テキスト（『現代中国12話・Ⅲ』『読解のコツ』）であった。

方向補語の説明を検討してみると、目的語の位置については、場所目的語とその他の目的語に分けて説明するものが2冊見られた。「目的語は“来”／“去”の前に置かれるが、物を表わす語であれば、“来／去”の後においてもよい」（『さらなる一步』）、「場所目的語は“来”“去”の前に置く」「その他の目的語は“来／去”の前または後に置く」（『2冊めの中国語』）とある。いずれも説明不足といわざるをえない。なぜならこれだけでは「物を表わす目的語」「その他の目的語」なら、どんなときでも“来”“去”の前・後どちらにおいてもよいと解釈できるからだ。実際は「物を表わす目的語」「その他の目的語」のとき、動作が未発生（未然）のときは“来”“去”の前、発生済み（已然）のときは“来”“去”の前後どちらも可能である。この点をもっとはっきり書くべきであろう。もっともほかの8冊のテキストは説明がほとんどなく、学習者に対していささか不親切である。

さらに方向補語で重要なのは、「派生義」といわれるものである。派生

⁹ 平山2008:19によると、目的語を“来”“去”のすぐ前におくものが、後におくものよりも多いということを示しながら指摘する。

義は方向補語のもつほんらいの意味、すなわち動作が行われる向きではなく、そこから派生した抽象的な意味のことである。派生といっても、もとの意味から連想できるような容易なものではないため、学習者は把握するのに時間がかかる。したがって派生義は方向補語の応用であるといえる。

準中級・中級テキストではどういった派生義が取り上げられるのだろうか。

10冊のテキストのうち、派生義を取り上げたものは4冊であった。そしてもっとも多かったのが「開始義」をもつ“～起来”である。そのほか“～上”(付着)“～出来”(新しい事物の出現)“～下来”(動作の継続)といったものがポイントに挙げられている。派生義は数は多くないが¹⁰、イメージをつかむためには多くの用例に触れる必要がある。準中級・中級テキストは、その意味では派生義の「入門」段階であるといえる。説明にはかなりの時間を要するものだから、大学2年次でそのすべてを取り上げるのは困難であろう。しかしまったく取り上げないのではなく、1つ2つ取り入れて派生義の存在を知らせておくのがよいと思われる。

6 可能補語

可能補語は大きく2つに分けられる。一つは「動詞+不/得+結果補語/方向補語」、いま一つは“～不起”などの可能補語専用の形式である。後者について「ガイドライン」では「可能補語としての後置成分(接辞)を加える形式」と説明している。

準中級・中級テキストを調べると、9冊のテキストが可能補語を取り上げている。可能補語の例としてよく登場するのが“看不懂”“听不懂”と

¹⁰ 相原ほか1996:259-262は、“来”“过”“上”“起来”“下来”“下去”“上来”“过来”“过去”の9つを挙げる。大西2011:11は、“上”“下来”“出来”“过来”“过去”“起来”の6つを中級段階で取り入れるべきものとして挙げる。

いった結果補語“～懂”を使ったものと、“看不完”“写不完”といった結果補語“～完”を使ったものであった(5冊)。可能補語に関しては、総じて初級テキスト以上の内容は出ておらず、既習事項の確認といった様相を呈している。

可能補語でやっかいなのは、可能を表わす助動詞を使うときとの使い分けである。これは長年、中国語研究の論点であったが、その成果が教育現場にどれだけ反映されているのだろうか。準中級・中級テキストでは、ただ『さらなる一步』のみが、つぎの3つの文を挙げてニュアンスの違いを示しているようだ。具体的な説明はなく、使用する教員にゆだねられている。

这么好的酒，在日本喝不到。

我喝多了，喝不下了。

病还没好，不能喝酒。

荒川2003:205は、研究の成果が教育現場に反映されていて、大いに参考になる。そこでは可能補語と可能を表わす助動詞との使い分けについて、「一般に、動詞が補語を伴っているとき、1)肯定形では助動詞も可能補語もともに使えるが、2)否定形では、基本的にも可能補語を使う。と覚えておくといいでしょう」と説明する。

では可能補語専用の形式はどうだろうか。これは7冊のテキストが取り上げている。もっとも多いものは“～不了”(5冊)で、つぎに“～不起”(3冊)であった。いずれもある理由から「～できない」と不可能を表わすものであるが、その違いを示唆しているのは、わずか3冊であった(『さらなる一步』『中国語への道』『読解のコツ』)。

筆者は、可能補語のニュアンスを説明することは、中国語学習の楽しさ、奥深さを教えるうえで、恰好の材料であると考えている。たとえば日本語では「食べられない」と一言で済ませるものが、中国語では“吃不到”(も

のがなくて)“吃不起”(お金がなくて)“吃不了”(多すぎて/苦手など条件的に)“吃不下”(お腹に入れるスペースがなくて)などと豊富である。外国語学習は母語との違いを知り、発想の多様性を理解することでもあるから、こういったものは早めに取り上げてもよいのではなかろうか。10冊のテキストのうち、『さらなる一步』と『中国語への道』がこの点を取り上げていた。

また可能補語専用の形式で、すでに1つの語彙として教えるべきもの、“看不惯”“来不及”を取り上げるものもあった(『さらなる一步』『読解のコツ』)。これらは語彙化しているものであり、単語として教えたほうがよい。もし可能補語の項目で載せるのであれば、いくつか例を出したうえで、語彙化していることを明記しておくべきであろう。

7 程度補語

さきに「ガイドライン」での程度補語の扱いは学習者の混乱を招きかねないものであること、程度補語は従来の参考書のように〈“得”がつくもの〉〈“了”がつくもの〉の2種類にわけるべきであること、を述べた。

いま準中級・中級テキストを調べてみると、なんと意外なことに、程度補語をポイント項目として取り上げたものは1冊もないのである。しかし、程度補語は日常会話でも頻繁に用いられるものである。

程度補語でやっかいなのは、それらのニュアンスをどう説明するか、である。たとえば“~死了”はもともと不本意なことに用いられるといわれてきたが、“高兴死了”のようによいことにも使われる。そうすると“高兴死了”“高兴极了”“高兴得很”“高兴得不得了”はどう違うのか。こういった点は明らかになっているとはいいがたい。それゆえテキストに取り上げるのを控えているのかもしれない。言語学では意味上近い2つ以上の表現がまったく等価であると考えことはなく、なんらかの違いがあるというのが、研究の基本姿勢とされている。しかし、たとえそうであっても、常

用されるもの、教育上必要とされるものについては、どんどん項目に入れていくべきであろう。

8 数量補語

数量補語とは、文字通り数字に関する種々の表現のことである。「ガイドライン」では「動作量、時間量、数量（比較の結果を示す）」を数量補語としてひとくくりしている。一方、10冊の準中級・中級テキストでは半数の5冊が「数量補語」を取り上げている。ところが、「ガイドライン」が挙げる「数量（比較の結果を示す）」を「数量補語」として取り上げるものはなかった。ほとんどが「動作量」と「時間量」についてのみ言及するだけである。

たとえば『2冊めの中国語』は「動量補語」という名称を使い、「動作の回数や継続する時間を表わす」と説明する。『さらなる一歩』では「動量補語」と「時量補語」の2つに分ける。

筆者としては、「ガイドライン」と準中級・中級テキストの取り上げ方いずれにも同意することはできない。

筆者は「数量補語」として「数量詞」「動量」「時量」の3つをまとめて説明することを提案したい。「数量詞」は統語論では「数量目的語」や「準賓語」などといわれるが、そのふるまいは「動量」と「時量」と平行している¹¹。たとえば、つぎの3つの文を見てみよう。

我喝了一杯咖啡。(数量詞)

我吃过一次烤鸭。(動量)

我学了两个小时汉语。(時量)

¹¹ 数量詞と動量、時量が統語的に共通点が見られることは、文法参考書でも指摘されている（丸尾2010：231）。

この“一杯”“一次”“两个小时”はいずれも動詞の後、目的語の前、に位置している。ところが、“我喝了一杯咖啡”の“一杯”は、通常、数量詞として動量、時量（補語）とは区別して教えている。そうではなく、これらに関連づけて、一つのカテゴリー、すなわち「数量補語」としてまとめて説明するのである。数量補語では語順がもっとも重要である。まず“一杯”を数量補語の例として取り上げ、その語順を確認し、それから動量、時量と進めば、学習者はすんなりこの語順になじめるのではないだろうか¹²。初級の段階でこれら3つを同時に教えるのは、数詞、量詞、時間の長さなど、情報量が多すぎて覚えきれないため、困難であろう。準中級・中級テキストでこれらをまとめて再確認するようにすれば、理解はよりいっそう深まるものと考ええる。^{補注}

それから、準中級・中級テキストには、目的語が地名のとき、代名詞のときの語順に関する規則が一つも述べられていない。これでは説明不足である。目的語が地名のときは、数量補語と目的語の語順が逆転してもよいこと（我去过一次中国＝我去过中国一次）、代名詞のときはかならず逆転すること（我见过她一次、我等了 you 一个小时）は、中国語検定でもおなじみの問題である。

さいごに「ガイドライン」の「数量（比較の結果を表わす）」についてだが、これは比較文を教える際に、数量以外の例（“～得多”、“～多了”と

¹² 平山2015:76は動量と時量に対して「ステップ翻訳練習法」を提案する。「ステップ翻訳法」はつぎの順に行われる。①対応する日本語文、②日本語文から数量補語を一旦削除、③数量補語を含めない文を中国語に翻訳、④動詞の後ろに数量補語を挿入、⑤文の完成。

補注：ただし、「時間の長さ」に関しては注意を要する。ここまで述べてきたのは動詞が持続性動詞の場合で、時間の長さは「持続時間」を指す。“来”“结婚”“毕业”“死”などの変化性動詞（瞬間動詞）の場合、時間の長さは「経過時間」（動作が実現・完了してどのくらいたったか）を指す。このとき語順は「動詞＋目的語＋経過時間＋了」となる。（“他来日本两年了”など）。

いった程度補語)と同時に語順を説明したほうがよいと思う。いずれも比較の差を表わすもので、形容詞の後につくからだ。

他比我大一岁。

这双鞋比那双鞋大一点儿。

这儿的菜比那儿的菜好吃得多。

他的病比以前好多了。

9 様態補語

「ガイドライン」でいうところの「状態補語」は、準中級・中級テキストでは「様態補語」というものももっとも多く(6冊)、「状態補語」というものが1冊、「程度補語」というものが1冊であった。2冊のテキストはポイント項目として取り上げていない。文法参考書でも「様態補語」とするものが多いことから、ここでは「様態補語」という名称を採用する。

様態補語には大きく2つのパターンに分けられる。一つは「動詞+得(+副詞)+形容詞」で、日本語で「Vするのが…だ」「Vのしかたが…だ」と説明されるもの、いま一つは「形容詞/動詞+得+フレーズ」で、「…なくらいAdj/Vだ」「Adj/Vなので…だ」といわれる因果関係を表わすもの、である。

前者は初級テキストでも初めのほうに出てくるものがあり、学習者にとってさほど難しいポイントではないと思われる。ただ、動詞に目的語が伴う場合、目的語を“V得”の前におかなくてはならない点は、授業で強調しなくてはならない。この点は、準中級・中級テキストでも多くが例文で示したり、説明を加えたりして、注意を喚起している。また『中国語への道』のように、様態補語が比較文とともに使われる例を取り上げており、中級らしさが垣間見える。しかし、全体的には、初級で学んだ内容の再確認という傾向が強く、後者のパターンが見られないのは、準中級・中級テ

キストとしてやや物足りない気がする。

また、様態補語と可能補語（たとえば“写得好”は、これだけだと様態補語 [書くのがうまい] と可能補語 [うまく書ける] とも解釈できる）、様態補語と結果補語との使い分け（たとえば“写得很好” [書くのがうまい、よい内容のものを書いている] と“写好了” [ちゃんと書いた、問題なく書いた] など、難しい問題もあるが、これらは上級になってから説明すればよいのではないだろうか。

10 さいごに

以上、本稿では準中級・中級テキストに見られる補語の取り上げ方を見ながら、筆者なりの意見を述べてきた。10冊のテキストでポイント項目になっている各種補語は、全体的には初級で学んだ内容を再確認するものが多く、新たな内容を取り上げるものはほとんどないといってよい。

たしかに補語は一回学んだだけでは、すぐに習得するのが難しいものである。基本的な知識をくり返し説明することは、学習者にとって有益なことである。しかし、そうであるならば、各種補語に対してもっと系統立てて説明する工夫があってしかるべきである。

筆者は、既習事項のくり返しだけでは大学2年次の教育としてはやや物足りないのではないかと考えている。既習事項を確認しつつ、そこに複雑な用法・用例を加えていき、中国語の知識を豊富にしていくことこそ、準中級・中級テキストに求められる課題ではなかるうか。この点において、補語にのみ限っていえば、現行のテキストにはまだまだ問題が多く、検討の余地があると思われる。

〈参考文献〉

秋山淳2011「中国語教育において、予め整理しておくべきこと—結果補語をモデルとして—」『西南学院大学言語教育センター紀要』第1号。

- 相原茂ほか1996『WHY?にこたえるはじめての中国語の文法書』同友社。
- 荒川清秀2003『一歩すすんだ中国語文法』大修館書店。
- 2013『基礎徹底マスター！中国語練習ドリル』NHK出版。
- 浅野雅樹2012「語彙を中心とした中国語中級テキスト作成に関する研究序説：
学習者にとって必要な語彙情報は何か」『下関市立大学論集』第55巻第3号。
- 2013a「中国語中級テキストにおける練習問題についての調査と考察：
語彙学習に関する問題作成の試み」『下関市立大学論集』第56巻第3号。
- 2013b「中国語語彙教育の課題と語彙学習中心の中級テキスト作成に向
けての考察」『藝文研究』第105号(2)。
- 大西智之2011「中国語中級段階に導入すべき文法項目試案」『帝塚山大学人文学
部紀要』30号。
- 興水優・島田亜美2009『中国語わかる文法』大修館書店。
- 張文青2011「中国語の「補語」教授法に関する試み」『Polyglossia : the Asia-Pacific's
voice in language and language teaching』21。
- 平山邦彦2008「日本人学習者を対象とした中国語教育に関する一考察—その言
語背景を考慮に入れて—」『拓殖大学語学研究』第117号。
- 2015「中国語の数量補語教育に関する一考察：目的語との語順を巡っ
て」『拓殖大学語学研究』第132号。
- 町田茂2004「中国語教育と教材開発の課題」『教育実践研究』第9号。
- 丸尾誠2010『基礎から発展までよくわかる中国語文法』アスク出版。
- 2011「中国語の方向補語について—日本人学習者にとって分かりにくい
点」『言語文化論集』第32巻第2号。
- 姚艷玲2007「日本人中国語学習者による「補語」の習得に関する横断的研究」
『中国語教育』第7号。
- 2008「日本人中国語学習者による「補語」表現の習得研究」『中国語教育』
第8号。